中日新聞　平成２７年　７月２３日（木）

(株)角文

越前和紙のノート完成

福乃ここ千手帳

福井市文京４の文具店「角文」が最高の書き心地を求めて和紙メーカー「山田兄弟製紙」（越前市不老町）などと共同開発した越前和紙製ノート「福乃ここ千手帳」が完成した。（藤共生）

「福乃ここ千手帳」を手にする角谷恒彦社長＝福井市西木田2の福井商工会議所ビルで

福井の角文共同開発「流れるような書き心地」

角文の角谷恒彦社長が開発に乗り出したのが二〇〇八年。当時、筆記に最適と評判だった「バイキングフールス紙」が生産を終了し、万年筆愛好家の間で惜しまれていた。「あの紙を越前和紙で復刻できないか」。社長の奮闘が始まった。

紙すきの地元、越前市今立地区を回って協力企業を探したところ、山田兄弟製紙が名乗りを上げた。県工業技術センターも共同開発に加わり、商品化に向けて試行錯誤を重ねてきた。

出来上がった紙は越前フールス和紙「福乃流れるような書き心地」と名付けた。

家からは「普通の紙と和紙の雰囲気が絶妙のバランス」と高好評を得ているという。

手帳の表紙には京都市の老舗、龍村美術織物の布地を採用した。手帳は縦二四・三センチ、横九・三センチ。全六十四枚で、両面に書き込める。価格は六千八百円。問角文＝〇七七六（22）７７３１。また、開発紙は少量からの受注生産も可能。問山田兄弟製紙＝〇７７８（43）００４３